

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320004

研究課題名（和文）宗教における犠牲の論理と倫理に関する哲学的研究

研究課題名（英文）Philosophical studies on the logic and ethics of sacrifice in the religions

研究代表者

高橋 哲哉（TAKAHASHI TETSUYA）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60171500

研究成果の概要（和文）：旧約聖書の「殉教」物語の検討から、ユダヤ教的「殉教」観念が靖国思想に酷似した犠牲の論理から成り立っていること、キルケゴールがアブラハムによるイサク犠牲の物語に読みこんだ「悲劇的英雄」と「信仰の騎士」の区別は厳密には成り立たないことを確認した。ニーチェがナザレのイエスに見た「根源的キリスト教」は、罪からの解放のためにいかなる贖いも求めない「犠牲の論理なき宗教」だという結論を得た。

研究成果の概要（英文）：We confirmed that the Judaic concept of martyrdom was founded on the yasukuni-like logic of sacrifice, and that the rigorous distinction between tragic hero and knight of faith which Kierkegaard had found in the sacrifice of Isaac by Abraham was not possible. We concluded that the original Christianity which Nietzsche had found in Jesus of Nazare was a religion without sacrifice which demanded no redemption for liberation from sin.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	5,900,000	1,770,000	7,670,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学倫理学

キーワード：宗教、犠牲、殉教、贖罪、キリスト教、負債、国家

1. 研究開始当初の背景

研究代表者（高橋）は、靖国神社の形を取った戦死者の国家的顕彰の思想は、決して近代日本に特殊なものではなく、近現代国家に普遍的に見られると同時に、欧米では古代国家以来「祖国のために死ぬこと」（pro patria mori）を神聖化する思想

として脈々と存在してきたことを認識し、それを「国家のための自己犠牲」の論理と倫理という観点で、『国家と犠牲』（2005）という研究にまとめていた。

他方、西洋においても日本においても、「国家のための自己犠牲」の論理と倫理は、有力な宗教思想における「犠牲」の論理と

倫理に結びつき、むしろそれによって強化されていることが注目された。戦時中の日本でキリスト教および仏教が靖国思想と一体化した際の論理を一般化して言えば、宗教とは「自我」を「無」にして「聖なるもの」(神、仏)に帰一するものだ、という自己犠牲の論理であった。

西洋においてそれは、キリスト教の「殉教」(martyrdom)の思想が、国家の求める国民の犠牲をたえず正当化し、近代国民国家においても、ナショナリズムという世俗化された「市民宗教」の背景に、つねにキリスト教の「犠牲」の論理が存在する、という事態をもたらした。それはまた、ユダヤ教とイスラム教の世界において、アブラハムによるイサク犠牲の聖書物語が、世俗の国家・社会においていかに大きな精神的規範の役割を果たしてきたかにも現われている。

こうしたことから、次のような哲学的問いが提起される。すなわち、本来は超越の次元にあるべき宗教的な「犠牲」の論理は、なぜつねに、国家をはじめとする世俗世界の「犠牲」の論理に重ねられ、利用され、取り込まれていくのか。本来、宗教の「犠牲」の論理は超越的なものとして、世俗の「犠牲」の論理から真に区別することができるのか。もし区別できるとすれば、どのようにしてか。区別できないとすれば、国家など世俗世界を超える宗教的信仰と倫理は、いかにして成り立つのか。「犠牲」の論理なき宗教は成り立つのか、成り立たないのか。

本研究はしたがって、国家における犠牲の論理の研究から、国家を超える宗教の犠牲の論理と倫理を問う研究として、研究代表者(高橋)の従来の研究を発展させる意味を持っていた。

2. 研究の目的

本研究は、以下の問いに答えることをめざした。超越的とされる宗教の「犠牲」の論理は、世俗の「犠牲」の論理から区別することができるのか。もし区別できるとすれば、どのようにしてか。区別できないとすれば、国家など世俗世界を超える宗教的信仰と倫理は、いかにして成り立つのか。「犠牲」の論理なき宗教は成り立つのか、成り立たないのか。

3. 研究の方法

本研究の基本的な方法は、研究代表者と研究分担者と連携研究者が、各自の専門分野に基づく役割分担に沿ってテーマにアプローチし、その研究の成果を互いにつき合わせ、相互に検証し合って、研究代表者を中心に包括的・総合的研究にまとめあげていくという方法である。

まず第一に、ユダヤ・キリスト教思想と日本の宗教思想において、「犠牲」(サクリファイス)の観念がどのように機能しているかについて検証する。同時に、現代哲学において「犠牲」の構造が問題になっているケースを取りあげ、哲学における犠牲論の現代的可能性を確認する。

第二に、宗教における「犠牲」の論理が、国家など世俗世界における「犠牲」の論理から、どれだけ区別されうるかについて検討する。現代哲学における犠牲論の検討は引き続き実施し、とくにデリダの『死を与える』における「犠牲論の脱構築」について、その意味と射程を検証する。

第三に、「犠牲」の論理をもたない宗教的信仰が成り立つのかどうか、を検討する。現代哲学における犠牲論の検討を引き続き行なうと同時に、ニーチェにおける「根源的キリスト教」、すなわちパウロ的「十字架の神学」ぬきのキリスト教とはどんなもので、「犠牲なき宗教」の可能性にどのような示唆を与え

ているのかについて検討する。

4. 研究成果

(1) 2009年度

ユダヤ・キリスト教思想と日本の宗教思想において犠牲（サクリファイス）の観念がいかに機能しているかを検討することによって、「殉教」の思想の重要性が明らかになった。最近、日本のキリシタン禁制時代に「殉教」した日本のカトリック信者多数が教会によって「列福」されるに至ったが、殉教者を列福・列聖すなわち信仰の模範として顕彰するという儀礼は、祖国のために死んだ戦死者を自己犠牲の模範として顕彰する国家儀礼と同型性をもっている。「神のために死ぬ」殉教の観念はキリスト教以前にユダヤ教において発達し、旧約聖書外典の「マカバイ記Ⅱ」に記された「エレアザールの殉教」および「7人兄弟の殉教」には、律法を守って死ぬ者が崇高な犠牲精神を発揮するとき、それが模範となって後に続く者を鼓舞するという犠牲の論理と、殉教者の母が息子の自己犠牲を名誉として受け入れるという「靖国の母」にも似た感情構造が確認できる。

近代の国家・民族による犠牲の論理の原型が、このユダヤ教的「殉教」観念にあることを踏まえ、遡って「創世記」22章のアブラハムによるイサク奉獻の物語の意味も再検討した。キルケゴールはこの物語を解釈して、国家・民族の犠牲の論理を体現する「悲劇的英雄」から、アブラハムのように単独者として犠牲を決断する「信仰の騎士」を区別したが、父が息子の犠牲を信仰ゆえに受け入れる「信仰の騎士」の構図は「7人兄弟」の殉教と母の関係に同型的であり、「悲劇的英雄」と「信仰の騎士」を厳密に区別することは困難になるという結論を得た。

(2) 2010年度

宗教の犠牲の論理が国家など世俗の犠牲の論理からどれだけ区別されるか、また特にデ

リダの『死を与える』等における「犠牲の論理の脱構築」について検討した。国家の犠牲の論理との区別については、内村鑑三の日露戦争時の「非戦主義者の戦死」という特異なテキスト、また日中戦争や太平洋戦争中の仏教者のテキストを読解し、世界平和のため又は国家のためという世俗的目的のための「尊い犠牲」として戦死を捉え、それを宗教的な自己犠牲ないし無我の境地に重ねることから両者の融合が生じること、死による喪失を何かのためのものとして有用なものとし、喪失を喪失として維持できずに有意義性によって埋め合わせようとする「犠牲」の観念に依拠する限り、宗教と国家の融合を止めるのは難しいことが確認された。デリダはイサクの犠牲をキルケゴールにほぼ忠実に解釈するが、アブラハムによるイサクの放棄が倫理的なものの目的論的停止であろうとしながら、最後に神の「赦し」によってイサクが回復されることのエコノミーを問題にする。つまりデリダは最終局面でキルケゴールをも離れ、放棄したものが同等またはそれ以上の見返りを受けるといったエコノミーに支配された限りでの「犠牲」の観念そのものを問題視する点で、いっそうラディカルである。

(3) 2011年度

「犠牲」の論理をもたない宗教的信仰が成り立つかどうかについての検討に着手した。ニーチェの『反キリスト者』における「十字架の神学」批判を検討した結果、そこには、本来「犠牲」の論理とは無縁で「生」そのものの根源的肯定を意味していたナザレのイエスの信仰が、イエスの死後、弟子やパウロによって、十字架上の刑死を「犠牲死」として、人類の原罪＝神への「負い目」＝「負債」を帳消しにする「贖い」＝「償い」と解する「キリスト教」へと変質した、という批判が見られることが明らかになった。ニーチェが『道徳の系譜』で指摘した、罪と罰を中心とする道徳観念は「負い目」とその帳消しという債権・債務の経済論に支配されているという事

態は、本研究の視点からは、罪を帳消しにするためには一定の「犠牲」が必要で、その究極は「血塗られた死」による支払いである、という「犠牲」の論理に読み替えることができる。この理解を手がかりとすれば、ニーチェがナザレのイエスに見た「根源的キリスト教」は、罪からの解放のために、いかなる支払い＝賠償＝償い＝贖いをも要求しない、善悪の彼岸の生の根源的肯定としての「犠牲の論理なき宗教」と考えられる、という結論を得た。この観点から本研究は、日本の神学界で論争を呼んでいる青野太潮氏の「十字架の神学」を検討し、それはパウロに依拠するなど一見ニーチェと対立するかに見えるが、実際には「犠牲の論理なきキリスト教」の地平を描き出す重要な業績であることを見出した。これと対照的に、大きな影響を与えてきた内村鑑三の「十字架」理解について、罪の賠償として厳罰（死刑）を要求する交換経済の論理を核としており、典型的な犠牲の論理と解されるという見地から批判的に検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 山本芳久、トマス・アクィナスとストア派倫理学、中世思想研究、査読有、53 巻、172-176、2011
- ② Yamawaki Naoki, The Idea of trans-national Public Philosophy as a Comprehensive trans-Disciplin for the 21th Century, DIOGENES, 査読有, 227 巻, 135-149, 2011
- ③ 黒住 眞、日本の思想的諸伝統とキリスト教、仙台白百合女子大学カトリック研究所論集、査読無、15 巻、29-56、2011
- ④ 山本芳久、トマス・アクィナスとストア派倫理学、中世思想研究、53 巻、172-176、2011

⑤ 山脇直司、グローバル正義論の現状と課題、国際社会科学、査読無、60 巻、39-46、2010

⑥ Tetsuya Takahashi、Le procès de Tokyo, l' empereur et la question du Yasukuni, Droit et Cultures、査読無、58 巻、21-28、2010

⑦ Naoshi Yamawaki、Philosophie und Ethik für die integrative Gesellschafts-theorie, Deutch-japanische Gesellschafts für integ-rative Wissenschafts, 査読無, 5巻, 2009

⑧ 山脇直司、トランスディシプリンとしての哲学の復権、思想、査読無、1022巻 6-28、2009

[学会発表] (計 12 件)

① 高橋哲哉、What March 11 Means to Me, What March 11 Means to Me : A Symposium in Honor of Norma Field, 2012/3/10, アメリカ・シカゴ大学

② 野矢茂樹、他者と物自体、第 50 回哲学会、2011/12/4、東京大学

③ 古荘真敬、ひとりあること／共にあること—和辻とハイデガーをめぐる試論、第 50 回哲学会、2011/12/3、東京大学

④ Furusho Masataka、Being Aware of One's Own Life, The 6th BESETO Conference of Philosophy, 2012/1/8、東京大学

⑤ 山本芳久、アヴェロエスとイブン・ルシュド、西洋中世学会、2011/6/26、京都大学

⑥ 高橋哲哉、「内村鑑三生誕 150 周年記念シンポジウム」、内村鑑三生誕 150 周年記念事業委員会、2011 年 3 月 20 日、今井館聖堂講堂

⑦ 高橋哲哉、「追悼と犠牲—終わりなき喪のために」、5.18 研究所、日本平和学会、2010 年 4 月 30 日、全南大学校

- ⑧高橋哲哉、殉国と殉教—犠牲の宗教への問い、国際学術会議「靖国の歴史的再証明」、2009年12月4日、高麗大学校東アジア文化交流研究所
- ⑨黒住眞、日本の近代化・大学における諸思想とキリスト教、日本カトリック神学会第21回学術大会、2009年9月13日、上智大学
- ⑩黒住眞、近代日本哲学における宗教とその後、日本学術会議哲学委員会・日本哲学系諸学会連合・日本宗教研究諸学会連合、2009年11月29日、日本学術会議
- ⑪山脇直司、Bürger und Staat in Japan aus Sicht der public Philosophie, 第14回ドイツ語圏日本研究者会議、2009年9月30日、ハレ大学
- ⑫ Yamawaki Naoki, Zur integrative Gesellschaftstheorie für nachhaltige Gesellschaft, 独日統合学学術会議、2009年11月1日、ボン大学
〔図書〕(計10件)
- ①高橋哲哉、集英社、犠牲のシステム 福島・沖縄、2012、222頁
- ②高橋哲哉・高史明、大月書店、いのちと責任、2012、204頁
- ③高橋哲哉(共著)、教文館、神こそわれらの砦 内村鑑三生誕150周年記念、2012、74-86
- ④山脇直司、筑摩書房、公共哲学からの応答—3・11からの衝撃の後で、2012、222頁
- ⑤野矢茂樹、講談社、語りえぬものを語る、2011、483頁
- ⑥高橋哲哉ほか(共著)、白澤社、殉教と殉国と信仰と、2010、173頁
- ⑦高橋哲哉ほか(共著)、新教出版社、光は闇の中に輝いている—靖国・天皇制・信教の自由バプテスト40年の闘い、2010、50-75頁

- ⑧高橋哲哉ほか(共著)、郷土出版社、安全・安心を問いなおす、2009、25-35頁
- ⑨山脇直司、筑摩書房、社会思想史を学ぶ、2009、220頁
- ⑩山脇直司ほか(共著)、ミネルヴァ書房、働くことの意味、2009、227-247頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 哲哉 (TAKAHASHI TETSUYA)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：60171500

(2) 研究分担者

山脇 直司 (YAMAWAKI NAOSHI)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号 30158323

黒住 眞 (KUROZUMI MAKOTO)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号 00153400

北川 東子 (SAKIKO KITAGAWA)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号 40177829 (2011年11月4日に研究分担者から削除)

野矢 茂樹 (SHIGEKI NOYA)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号 50198636

山本 芳久 (YOSHIHISA YAMAMOTO)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号 50375599

古荘 真敬 (MASATAKA HURUSHO)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号 20346571

(3) 連携研究者

信原 幸弘 (YUKIHIRO NOBUHARA)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号 10180770

石原 孝二 (KOHJI ISHIHARA)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号 30291991